

第4講 コモンズとポスト資本主義の倫理

WAKAMORI Fumitaka

1 コモンズの世界観

2 人間と自然との互惠関係

3 人間と自然の植民地化と脱植民地化

1 コモンズの世界観——すべては相互依存関係にある

- さまざまなコモンズの展開は、経済と政治が人びとの日常の対話とコミュニケーションのなかにあり、日常の生活から自立した形態（資本主義的市場経済、代表制と多数決の民主主義）をとらない
- 資本主義経済と近代国家の発展を支えた世界観

人間と自然の分離、精神と身体との分離、主体と客体の分離、個人と集団の分離（自立的な利己的個人）という対立的二元性（二元論的世界観）を問い直す

- 「すべてはつながっている」という反二元論的な関係論的世界観を対置する(Bollier & Helfrich 2019:37)。

近代の二元論と植民地化、囲い込み

- 囲い込みと植民地化とほぼ時を同じくして登場した啓蒙主義、とくにベーコンとデカルトの二元論
- 自然を生命と精神性をもたない「人間以下のもの」、不活発な機械と同じような物質という認識を広める
- 人間が「人間以下のもの」である生物界と大地を支配し、そこから資源や天然資源を抽出し搾取することを正当化
- 資本主義発展の基本条件を支える世界観を用意
- 人間の身体に宿る労働力を精神性のない客体として扱い商品として売買可能なモノにする、労働力の商品化という資本主義発展の基本条件の思想的基盤になる
- 資本主義が植民地化によってグローバルサウスの大地と人間を「モノ」として収奪の対象にすることを正当化することにつながった。

21世紀のコモンズと近代的自然観を批判

- 21世紀のコモンズ：囲い込みや植民地化によって収奪され破壊されたコミュニティを、資本主義と国家に対抗する文脈で復権
- 先住民コモンズ、生態系コモンズ、生産者協同組合連合、コモンズとしての都市、デジタルコモンズなど、さまざまなコモンズが展開
- 現代のコモンズ：自然を人間から分離して存在する生命のないモノとして認識する近代的自然観を批判、自然の一部としての人間の経済活動を地球環境の再生許容量の範囲に抑制
- 自然を人間と同じ生きものとして認識し、人間と自然の互恵的なつながりを回復しようとする
- 生態系コモンズを営む先住民コモンズ：動植物や山河を精神性や霊性のある主体として認識し、人間と自然との互恵的な関係を維持

ポテトパーク

- 南米アンデス高地、ペルーのクスコ渓谷にあるポテト・パーク
- 生物資源としての約四〇〇〇種のジャガイモとその栽培・保存についての伝統的知識という共有資源を、ケチュア族系先住民の6つのコミュニティが慣習法に基づき共有し共同利用するという形で二〇〇〇年代に設立されたコモンズ
- 世代を超えた生態学的および生物文化的慣習の役割の重要性を認識することから生まれた先住民生物文化遺産地域(IBCHA)モデルによって運営
- ポテト・パークでは、人口約四〇〇〇人が9千ヘクタールの土地を利用、ジャガイモ、オオムギ、トウモロコシ、豆などの作物が、アンデス高地の共有農業(open field system)に従ってコミュニティの共同管理する輪作(3年から9年の周期で施行)で栽培
- ポテト・パークの特徴: 気候を異にする標高に応じた伝統的な土地利用計画、3つのゾーンに分かれ、高地ではラマの飼育と原産のジャガイモだけが栽培、中間の地帯ではジャガイモの他にオオムギ、豆類、キヌアの耕作、低地帯では中間地帯と同じ作物に加えてトウモロコシが栽培。標高差と気象の相違に応じた土地利用→アンデス高地に生物資源の多様性を育んできた

アイリュ(allyu)と呼ばれる互惠的で精神的な相互関係

- ペルーやボリビアなどのアンデス高地の先住民:自分たちが、大地や動植物、山や川と、アイリュ(allyu)と呼ばれる互惠的で精神的な相互関係を築いて暮らしていると考えている
- アイリュ=人間、動物、植物、食用作物、山、川、岩などを一つの生態学的なまとまりとするコミュニティである
- Bollierによれば、アイリュは「同じ関心を持つ諸個人が、人間、動物、岩石、精霊、山、湖、川、牧草地、食用作物、野生動物などに関する共通の規範を通じて結びつく政治的・社会経済システムである」(Bollier,D.2015)
- アイリュの主な目的:スマック・カウサイ(Sumaq Qausay)と呼ばれる人間と自然との調和のとれた良好な関係を達成すること
- 今日の用語でいえば「ゆたかな生well-being」を意味するスマック・カウサイを達成するために、世代を超えた生態系のあらゆるものの相互依存関係の維持がもっとも大切な規範とされ守られてきた
- アイリュの世界観:大地は人間にジャガイモ、その他の作物、動物を与えてくれ、人間はその贈与に返礼しなければならない。母なる大地(パチャママ)と人間との精神的な互惠的関わりは、ゆたかな生としてのスマック・カウサイの中心的要素となっている。

アイリユ思想を継承するポテト・パークの取り組み

- アイリユ思想に基づく生物文化システムは、ヨーロッパによるペルーの植民地化以来、衰退を余儀なくされたが、それでもさまざまな困難を生き延び、その多様性と伝統的知識を維持してきた。
- しかし、何世紀にもわたってペルーのアンデス高地の先住民が形成してきた生物文化システムの多様性は、アメリカ合衆国と結んだ自由貿易協定による資源の私有化や天然資源の採掘、観光客の増加によって、また、クスコ渓谷の特徴的な生態系の恵みである多様な生物資源とアイリユの伝統的知識を収奪し市場商品に変えようとするバイオテック企業や農業関連企業の動きによって、近年失われつつある。
- アイリユ思想を継承するポテト・パークの取り組み：アンデス高地の山岳生態系というランドスケープを保全し、ジャガイモを中心とする原産穀物の保護とその生育地の多様化をめざす
- とともに、伝統的生物資源の知識をデータベース化（品種ごとの栽培、加工、保存、料理の方法を記録）することでそれに対するコミュニティの権利を明確化し、生物資源と伝統的知識という共用資源をバイオテック企業から保護することを意図している

先住民のコモンズの人間自然関係

- コモンズ＝共用資源を利用者のコミュニティが自治的にルールを作り持続的に維持管理することを特徴、人間自然関係のつながりはコミュニティの構成員の対話と討論を通しての合意に基づいて意識的に回復される
- 伝統的コモンズ、先住民のコミュニティ＝人間自然関係のゆたかなつながりを伝統的な知識や規範によって維持
- 先住民の多くのコミュニティ：植物や動物だけでなく、川や山などの無生物も人格を持つと考えられており、人間と自然との親密な相互依存性が維持されている。
- たとえば、マレーシアの熱帯雨林に暮らす先住民、チェウオン族：自分たちのコミュニティが植物、動物、森、川を含んでおり、「すべての生物は・・・生命の網を形づくる相互依存関係を維持することに対して倫理的責任を負っている」と考えている（ヒッケル 2023:263）。
- アマゾンの熱帯雨林に暮らすアチュアル族：「森を共有する、人間でない（あるいは人間以上の）多様な人格からなるコミュニティと・・・相互関係にあり、コミュニティが存在しなければ、自分たちも存在し得ないことを理解している」（ヒッケル 2023:260）。

自然観をめぐる先住民のコミュニティと資本主義および国民国家との対立

- ニュージーランドのマオリ族：政府が1840年に祖先伝来の漁場における石油採掘を許可したことに対して闘った。
- 国家が海を生命のない資源と考え、市場の論理で搾取できる限定的な単位に分割可能であると思なったのにたいし、マオリ族は海を自分たちとの世代を超えた深いつながりをもつ生きものと見なしていた。
- またマオリ族は、ニュージーランド北島を流れるワングヌイ川に日々の暮らしの糧を依存し、川によって生かされていることから、ワングヌイ川に「人格」を認めてきた。
- 彼らは、「私は川であり、川は私である」という表現で自分たちと川との連続性を深く意識し、川の自然を保護することを自らの責任と考えている。
- マオリ族の人びとは、たびたび持ち上がるワングヌイ川の開発計画に反対し、川の法的な人格権を政府に要求し続けてきた。
- ニュージーランド政府：2017年にワングヌイ川に法人格を認める。法人格が認められたことで、ワングヌイ川の破壊や汚染は、人間の生命や健康を侵害することと同じになった（奥野2024:184-185）。

ウブントウ

- ・ウブントウ ubuntu: 我と他者の深い相互依存関係を示す西アフリカのバン
トウー語
「我Iは我々Weあってこそであり、我々があるがゆえに我がある」ことを表現
する言葉、アフリカ大陸で広く使われている。
- ・ウブントウは、英語のI とWe のように我と我々が分け隔てられ分離され
ていない。言わばIのなかにWeが入れ子として入っている。
- ・ボリアーは集団対個人の二分法に対抗して、ウブントウ的合理性と「入れ
子された我」(Nested I)を提起する。
- ・ウブントウ的合理性は、個人の利害と他の人びとのゆたかな生とのあいだ
の深いつながりを表現する人間の相互作用の論理
- ・西洋の個人主義、自己の利益を最大化する行動として定義される経済的
合理性に対置される。

ウブントウの定義

- 人類学者ニヤムンジョによれば、ウブントウという思想は、個人を他の人びとの関係を通して定義するもので、個人の自立性と個性を過度に重視し、ある人が独力で他者の支援なしに成長したり成功を収めたりすることを賛美する資本主義文化とは対照的
- 「人は、他の人を通して人になる」、「人間の成長は完全に他者との間で相互依存している」と考える(ニヤムンジョ2019)
- 「他の人びとを通してのみ、個人は自分自身の存在、自分の義務、自分の特権、自分自身と他の人への責任について意識を持ちうる(『アフリカの宗教と哲学』の著者、ケニアのジョン・ムビティ)

社会の二極的な見方を批判、反二元論的な関係的存在論

- ・人間と自然、主体と客体、精神と身体を分離し分け隔てる二元論的世界観および、集団対個人、主体対客体、公的対私的、利己心対利他心、競争対協力といった社会の二極的な見方を批判、反二元論的な関係的存在論とそれを表現する基本的な言語を考案(Bollier et Helfrich2019)
- ・人間と自然を分離し、大地は人間から隔てられて存在する無生物であるという見方→土地や水を領有し商品化できる「資源」であるという認識をもたらすと批判
- ・集団対個人の二分法→ウブントゥ、入れ子された我nested I
- ・人間と自然の分離→人間と自然の互惠的交わり、精神的共有
communion
- ・公的対私的、政府対市場→コモンズ世界commonverse

2 人間と自然との互惠関係とポスト資本主義の倫理的責任

- 人間：地球上の他のすべての人ばかりでなく、生物コミュニティと相互依存関係にある。
- 相互依存の中で生きるとは、「相手が望むよりも多く取ってはならない」、すなわち他の種が再生できる量を超えて取ってはならないという原則を守ること
- 大きく言えば、人間の経済活動を自然界の再生能力範囲を超えて拡大しないという脱成長の原則を守ること
- 生物コミュニティから採集・捕獲した食べ物や伐採した樹木を受け取る際には、相手を尊敬に値する存在と認め、感謝の念を持っていたくこと、権利としてではなく贈り物として受け取ること

互惠性に気づく第一歩

- 現代人が、自然を構成する動物や植物、細菌によって自分たちが生かされているという互惠性に気づくことは容易ではない。
- 高度産業社会に生きる人間が、分け隔てている自然を自分たちの社会との連続性において理解し、自然との互惠関係に気づくための第一歩→人間は生きものであり、自らが生物コミュニティ(自然)の一員であるという事実を再発見することから始まる。
- 他種・多種の生きものとの連続性の高い生活をする狩猟採集民(現在の狩猟採集民、縄文時代の狩猟採集民)の生き方を現代の目で見直すことが手掛かりとなる。
- もらうより多くのお返しをするという互惠関係の原則を尊重するには、森の植物と動物について詳しく知っていなければならない。

他種・多種：世界を主観的に経験する主体

- 生態系についての知識の習得過程で、狩猟採集民は「これらすべての存在が独自の方法と感覚によって世界を経験し、独自の知性で世界と交流し、反応していることを、否応なく理解」、そのような主観的経験を通じて、他の種を「人間と同じように、世界を主観的かつ感覚的に経験する主体」(ヒッケル2023:265)と見なすようになる
- 人間と自然とを分離し自然を搾取・支配の対象と見なす現代社会の価値観を見直すには、狩猟採集民の世界観を原始的と見下すのではなく、文学の想像力(エコクリティシズム)や、現代の学問(生命科学、人類学、森林学)の知見に照らして再評価することが必要

文学の想像力 石牟礼道子『苦海浄土』

- 文学の想像力: 人間が相互依存関係において植物や動物などの他種・多種によって生かされていることを意識し、他種・多種に対してお礼の気持ちや尊厳を感じる時、人間と自然のあいだに互惠関係があるという感覚が生まれることを描いている
- 石牟礼道子『苦海浄土』: 漁民たちが魚介類を自然からの贈りものとして理解している様子を描いている。第4章「天の魚」の「海石」における江津野老人の酔い語りの中に次のような文章がある
- 「魚は天のくれらんすもんでござす。天のくれらんすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。これより上の栄華のどけにゆけばあろうかい」(石牟礼2004:221)。
- ここでは、魚を自然からの贈り物として受け取り、自然との互惠関係にかけがえのない豊かさを意識する感覚が捉えられている。

人間と自然とが絡みあう互恵的世界と魂

- 石牟礼が人間と自然とが絡みあう互恵的世界を描く際に「魂」という言葉を用いる。そこでの魂は宗教的次元でも前近代的なものでもなく、「脱身体的な次元のもの」でもなく、「慈しみ、食べ、生き生かされるという他種・多種との互恵性において感じ取られるもの」(石牟礼 2004:130)
- 生命誌研究者の中村桂子：科学と宗教との境界を意識しながら、人間と自然とのあいだに互酬関係(互恵関係)があるという感覚を抱くとき、自然に対して「モノとして捉えられない何かを思わずにはいられないことは確かです。ここで魂という言葉を用いることにやぶさかではありません」(中村2024:181)

近年の細菌研究ー＞人間と自然の連続性

- 近年の細菌研究：人間は自然界から分け隔てられた自立的な生きものではなく、膨大な数の菌類や微生物を腸や皮膚、呼吸器、口腔などに宿らせ、それらの常在細菌に支えられて生きていることを明らかにした。
- 人間の身体を構成する細胞数は37兆個、身体の中に生息する細菌数はそれを上回る数百兆個。
- その中で量も多く働きの重要なビフィズス菌や乳酸菌などの腸内細菌＝腸の消化作用を支え、また腸内の免疫細胞に働きかけ身体を守る免疫機能に寄与している（中村2024：66-70）
- 人間＝自然から分離していない、自然と絡み合った存在

樹木と菌類も相互依存関係

- 樹木と菌類も相互依存関係：木は菌根菌という土壌中の菌類と互恵関係にある。菌根菌は木の根の細胞に入り菌根を形成する。菌根菌は、植物が光合成によって作り出す糖の一部を分けてもらい、木は生育に欠かせないリンや窒素を菌根菌からもらっている。
- シマード『マザーツリー 森に隠された「知性」をめぐる冒険』：森林の樹木は菌糸によって繋がる樹木間のネットワークによって栄養やコミュニケーションやエネルギーを分かち合い、互恵や協力の関係を形成している(シマード2023)。
- 人間と樹木(森)のあいだの互恵的な関係：森林を散歩したり樹木の近くに住むと、血圧や心拍の指数が下がることや、気分がよくなり緊張、不安、怒りが減少する

ポスト資本主義の倫理としての互惠原理

- 相互依存関係＝互酬(互惠)関係によって初めて維持される。それゆえ、人間にとっても相互依存関係に対する責任とは、互惠原理を動物や植物、さらには生物コミュニティ全体へと広げ、互惠(互酬)関係を築いていくこと
- 人間は地球上の他のすべての人ばかりでなく、動物や樹木、細菌、菌類を含む生物世界とも相互依存関係にある。「ミツバチが人間の幸福に倫理的責任を負うのと同様に、人間はミツバチの幸福に倫理的責任を負う」(ヒッケル2023:261)。
- 相互依存関係は、互酬(互惠)、協力、共働の関係によって初めて維持される。それゆえ、人間にとっても相互依存関係に対する責任とは、互惠(互酬)の関係を築いていくこと

3 自然と人間のモノ化としての植民地化と脱植民地としての互惠関係の回復

- 資本主義経済システム＝人間と自然との相互依存関係を無視し互惠の精神ではなく、他の生物や川、森林、大気、漁場を組織的に搾取することに依存している。
- 16世紀から18世紀にかけてほぼ同時に並行的に展開した国内での囲い込みと国外での植民地化→人びとが共同で利用していた土地、水、放牧地、森林、川、漁場などのコモンズを囲い込み私有財産へ転換、農民や先住民の伝統的な集団的文化の破壊、人間と自然との分離という二元論的見方の強制、自然と身体を精神の外部にあるモノと見なし、それらから一方的に抽出・搾取、といった共通性を有している。

囲い込みは国内の植民地化であり、植民地化は国外での囲い込み

- カール・ポランニーの『大転換』(1944): 囲い込みによって土地とコモンズを奪われ飢餓状態で労働市場に放り込まれた19世紀初期のイギリス労働者階級の状態と、植民地化された南アフリカのカフィル族の状態との類似性、類似性の原因を「犠牲となる側の文化的環境の破壊」(とそれによる自尊心と規範の喪失、道徳的な墮落)に求めている。
- 「囲い込みは国内の植民地化であり、植民地化は国外での囲い込みだった」(ヒッケル: 60)
- 資本主義の発展は人間の搾取だけでなく、生態系の搾取に依存している。

ラテンアメリカの植民地化

- ラテンアメリカの植民地化：金銀を略奪したコルテスによるアステカ王国の征服（1521）とピサロによるインカ帝国の征服（1533）に続いて、スペイン人の入植者による先住民、土地、生態系に対する支配と搾取が大規模化、先住民のコモンズと伝統的文化が破壊され、土地や鉱山や森林が囲い込まれ私有財産に転換された。
- スペインのラテンアメリカ植民地支配：1820年代の「独立国家の時代」まで300年のあいだ続いた
- この間、先住民と自然との分離が大規模に引き起こされただけでなく、先住民の身体が囲い込まれ、征服者の所有物とされ奴隷として銀鉱山採掘や砂金採集、森林伐採やプランテーションで強制労働に従事させられた

エンコミエンダ制と人口の急減

- 先住民はエンコミエンダ制によって奴隷として働くことを余儀なくされた。16世紀に始まったエンコミエンダとは、先住民をキリスト教に教化することを条件に、彼らを事実上奴隷として使うことを征服者に認める制度である。
- 16世紀には、入植者によって自然と人間が困い込まれ乱開発された結果、生態系が歴史上かつてないほどの著しく損なわれ、先住民の人口は急減し、ガリアーノによれば、スペインによって滅ぼされたアステカやインカといったメキシコとペルーを中心とした中南米全体では、7000～9000万人の人口がコロンブス到来(1492年)の一世紀後には350万人にまで減っていた

ポトシ銀鉱山の犠牲者、天然痘の犠牲者

- 1545年に発見されたポトシ銀鉱山(現在のボリビア)で、過酷な強制労働によって犠牲となった数百万人(一説では800万人)の先住民に加え、ヨーロッパからの侵入者によって持ち込まれた天然痘や麻疹、ペスト、インフルエンザなどの病原菌に感染して死滅した1000以上の先住民が含まれている。
- 17-18世紀には、人口の減少によって衰退したエンコミエンダ制に代わって、大土地所有者が債務奴隷の先住民と奴隷貿易を通じて獲得した黒人奴隷を労働力とするアシエンダ制(大農園経営)が導入される
- 綿花やタバコ、砂糖などの輸出用単一商品作物を生産しヨーロッパに輸出するプランテーション(大規模農園)が発展する

奴隷貿易と大西洋三角貿易

- 大西洋三角貿易：ヨーロッパが武器や日常品を西アフリカの部族に販売し部族間の戦争を起こさせ、西アフリカが部族間戦争の捕虜や奴隷狩りの対象となった小さな集団を黒人奴隷としてアメリカ大陸に販売し、アメリカ大陸は黒人奴隷によって生産された綿花や砂糖をヨーロッパに輸出する貿易回路である。
- 奴隷貿易でアメリカ大陸に連行されたアフリカ人奴隷の総数は、1500万人から2000万人に上ると推定されている。

奴隷貿易の最大の特徴、身体の囲い込み

- 奴隷貿易のアフリカ社会に対する影響：
 - ①労働力の喪失と人口停滞
 - ②西洋の安価な製品の流入によるアフリカの職人の生計破壊
 - ③奴隷貿易で富を得た部族や商人層と被害にあった地域や少数部族との格差拡大などの有害な影響をもたらした(『アフリカ哲学全史』97－98)。
- このような奴隷貿易の最大の特徴＝「身体の囲い込みと植民地化」(ヒッケル60)である。身体の囲い込みは身体をモノとして扱うことである。身体
の囲い込みは身体をモノとして扱うことである。セゼールは『帰郷ノート
植民地主義論』において植民地化を自然と人間を「モノ化thingificationす
るプロセス」(セゼール2004:147)として捉えている。

ヨーロッパ列強によるアフリカ分割

- 奴隷貿易の禁止と奴隷制の廃止以後、西ヨーロッパ諸国の関心は、1870年代にスタンレーなどの探検家によって豊富な天然資源が発見されたアフリカ大陸内部に向けられ、資源の争奪戦が開始された。
- コンゴ川流域をめぐる各国の利害対立を調停するためにベルリン会議（1884-1885年）が開かれ、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカなどの列強14カ国が参加、植民地を領有するルール（占領した国の先占権とその条件として実効支配など）が決められた。
- これ以後、西ヨーロッパの列強によるアフリカ植民地化は雪崩を打って押し進められ、第一次世界大戦前の1912年までにエチオピアとリベリアを除くすべてのアフリカ大陸が列強によって植民地として分割された。最大の植民地を持つイギリス

植民地化の文化的哲学的次元

- 西ヨーロッパ諸国：帝国として植民地を支配し、資本主義発展に必要な鉱物資源や原材料、製品市場、資本投資の領域を確保
- 植民地化の文化的哲学的な次元：アフリカの原住民は伝統的な共同体主義の規範と文化のもとで暮らしてきた。「ある人がその人であるのは、他の人に支えられているからである」というウブントウの社会観は、与え受け取り、お返し、ものをどんどん回す互酬的な社会組織原理でもある。
- 植民地支配：賃労働制や貨幣経済になじまない「怠惰な」原住民に貨幣での納税を義務化、相互扶助のような共同体的慣行の否定と低賃金雇用の受け入れを強要。また、植民地化は原住民に、人間と自然との分離、精神と身体との分離といった二元論的世界観への転換を強制、資本による自然と人間の開発と搾取を容易にするものの見方を植え付けようとした

植民地化の本質：略奪と暴力の思想的正当化

- 総じて植民地化とは、「さまざまな自然経済、調和のとれた持続的な経済、土地の身の丈に合った経済の解体」であり、「食料生産の破壊、栄養失調の恒久化、本国の利益のために方向づけられた農業開発、生産物の強奪、原料資源の強奪」(セゼール2004:148)のこと
- キリスト教＝文明、異教＝野蛮、あるいは白人＝優等人種、黒人＝劣等人種という方程式を立てる人種主義は、暴力、略奪、殺戮による植民地支配を正当化する思想である(セゼール2004:134)。
- 植民地化の本質はこのような暴力、略奪、殺戮の思想的正当化にある(河野2024:225)。人種主義は原住民に劣等人種であると信じ込ませ劣等意識を植え付け、彼らの集団的文化と尊厳を破壊する思想でもあった。

生態系の崩壊ー＞身体と自然の脱植民地化

- 生態系崩壊の危機：身体と自然のモノ化の過程を逆転させ、脱モノ化と脱植民地化に取り組む必要性を示している。
- 資本主義と国家を超えようとするコモンズの動き：身体と自然の脱囲い込みのプロセスを開始するものであり、脱モノ化の具体的なあり様とプロセスを示している。
- コモンズの反二元論的世界観：植民地化とモノ化を根本的に乗り越えるには、資本主義発展の前提条件である身体と自然のモノ化を思想的哲学的に許容した精神身体の二元論、あるいは人間と自然とを分離し自然を思考なき客体と捉えた近代の二元論を超える課題を提唱している。
- ポスト資本主義の世界＝近代的二元論を超えた世界観をつくることでもまるる。反近代的世界観は、人間と自然、および人間どうしの相互依存関係を認識し、他者と他の生物を尊い存在であると理解し、ポスト資本主義の倫理として互惠関係を広げてくことから生まれてくるだろう。以上

参考文献1

- 参考文献
- Bollier,D.2015,The Potato Park of Peru, Bollier,D. & Helfrich,S.eds, Patterns of Commoning,The Commons Strategies Group.
- Bollier ,D.& Helfrich,S. 2019.Free,Fair and Alive:The Insurgent Power of the Commons, New Society Publishers.
- 石牟礼道子(2004)『新装版 苦海浄土』講談社。
- インゴルド、ティム(2020)『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子訳、亜紀書房。
- エイブラム、ディヴィッド(2017)『感応の呪文——「人間以上の世界」における知覚と言語』結城正美訳、水声社。
- 奥野克巳(2021)『絡まり合う生命——人間を超えた人類学』亜紀書房。
- 奥野克己(2024)『ひっくりかえす人類学』筑摩書房、2024年。
- ガレアーノ、エドゥアルド(2024)『収奪された大地』大久保光夫訳、藤原書店。
- キマラー、ロビン=ウォール(2018)『植物と叡知の守り人』三木直子訳、筑地書館。
- 河野哲也(2024)『アフリカ哲学全史』筑摩書房。

参照文献2

- シマード、スザンヌ(2023)『マザーツリー 森に隠された「知性」をめぐる冒険』三木直子訳、ダイヤモンド社。
- セゼール、セメ(2004)『帰郷ノート 植民地主義論』砂野幸稔訳、平凡社。
- 中村桂子(2024)『人類はどこで間違えたのか』中央公論新社。
- ヒッケル、ジェイソン(2023)『資本主義の次に来る世界』野中香方子訳、東洋経済新報社。
- 平野千果子(2022)『人種主義の歴史』岩波書店。
- ニヤムンジョ、フランシス・B・(2019)「アフリカらしさとは何か」梅屋潔訳、『世界』2019年.9月号。
- ポランニー、カール(2009)『大転換』野口建彦・栖原学訳、東洋経済新報社。
- 結城正美(2023)『文学は地球を想像するーエコクリティシズムの挑戦』岩波書店。